京都の桂園派歌人たち

兼清正徳

山口書店

兼清正徳

京都の桂園派歌人たち

山口書店

兼清正徳（かねきよ・まさのり）

著者略歴

大正三年山口県に生れる。

昭和十四年九州帝国大学国史学科卒業。

山口県文書館長、豊田工業高等専門学校教授、徳島文理大学教授などを歴任。

主要著書

『香川景樹』・『熊谷直好伝』・『木下幸文伝の研究』・『桂園派歌人群の形成』・『桂園派歌壇の結成』など

現住所　753山口市白石二丁目四ノ二一

京都の桂園派歌人たち

一九九〇年十二月二十日――発行

著者――兼清正徳

発行者――三宮庄二

発行所――株式会社山口書店

住　所――〒606京都市左京区一乗寺築田町七二

電　話――〇七五(七八一)六一二一

FAX――〇七五(七〇五)二〇〇三

印刷・製本――大村印刷株式会社

定価――三〇〇〇円(本体二九一三円)

ISBN4-8411-0708-8　C3095

もくじ

一　香川景樹の書翰と詠草　1
二　桂園派歌人　渡　忠秋　21
三　桂園派歌人　尾崎宍夫　83
四　桂園派歌人　須川信行　145
五　閨秀歌人　大屋久子　215
六　宇治の桂園派　251
あとがき　271

一　香川景樹の書翰と詠草

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

香川景樹[1]門人渡忠秋の門人須川信行についての小稿をまとめるために、福知山市に現住の須川家の所蔵資料を披見しているうちに、景樹研究の上で興味のある幾つかの書翰や詠草を新しく知見に入れたので、これらの資料についての私見を述べてみたい。

一　世継直員宛の景樹書翰

十一月二十五日付世継令君宛景樹書翰がある。

芳札忝拝讀仕候。
しかれバ、相希之竹画早々御染筆被下、殊更十分心に相叶、大祝着此事ニ奉存候。
此節別而御取込中之由、一際気毒奉存候。何分近日以参、御礼辞可申尽候。
只今持参可仕と存候彼方へ
ぬすみやま鵙のはやにへはやかくせ　山ほとゝぎす尋ねもぞする
と申遣哉と先刻考候。大ニ悪歌歟。
早々御礼拝答迄。申省候。頓首。
十一月廿五日　　景樹拝復
世継令君机下　　（須川家資料一）

宛名の「世継令君」とは世継直員のことであろう。

世継直員（よつぎなおかず）は京都三条高倉西で西陣織物を専門とした呉服卸商を営み、金銀用達（金融業）も兼業し、岐阜屋八郎兵衛という。字は伯周、号は希僊・台翁・寂窓と称する。洛東岡崎村の別荘を居然亭といい、村

瀬栲亭筆「居然亭記」がある。

和歌を香川景樹に学び、画は月僊に就き、茶道は松尾不俊斎から皆伝を得た。

景樹と直員とに就いての最初の記事は、享和元年三月二十八日に、景樹・桃沢夢宅[2]は直員を嵐山に郭公を聞きに行くことを誘ったが、他用で同行できなかったことである。（夢宅『蓬隠愚藻集』）

景樹は「直員ぬしをさそひやるついでに」として、

ほとゝぎすなかずばあらじと思ふまで　ことしはいたく夏めきにけり

（『桂園遺稿上』）

と詠んでいる。

このころ、直員は景樹・夢宅・奥村嘯月尼・柏原艶子[3]・鎌田昌子・惟良・迪子・則子・和子の九人と『十五番歌合』の歌を詠んでいる。（飯島紘氏蔵同上書）

文化三年十二月七日、木下幸文[4]・田山敬義が永観堂に近い直員の別荘を訪れて歌を詠んだ。（『木下幸文日記』）

年月不明の景樹の歌。

世継直員が家に藤の宴したりける日、えまからでよみてつかはしける。

わがやどにものうげにふる春雨は　ねたくも花のしづくなるらし

（『桂園一枝』）

天保八年、七箇の松笠の自画に自賛の半折がある。

あしたづのかいこにたるまつの実の　これも千とせの年をふくみて　七十二齢直員

（中井誠三郎氏蔵）

天保十二年に七十六歳の自画像を画いた。

（中井誠三郎氏蔵）

天保十四年十一月十七日没、七十八歳。法名は寛誉希僊寂窓禅定門。大雲院に葬られた。直員の作歌のいくつかを挙げておく。

老子　遙かにも仰げば高き太虚の　くもにあとなき小車のみち　寂窓（花押）（世継尚氏蔵）

滝五月雨　かさなれる山もとゞろに五月雨の　雲や水上那智の大滝　直員（『平安人物志短冊集影』）

水底款冬　春風に池のうきくさかたよりて　あらはれ初る山ぶきの影　寂窓（同前）

題しらず　君が代の千とせを何にたとへむに　うれしく松のある世なりけり　直員（『桂花余香』）

早秋扇　袖扇風よわきときまでやつるれど　残るあつさに捨もおかれず　直員（『類題和歌玉藻集初編上』）

文献　京都名家墳墓録・徳力富吉郎「台翁世継寂窓」（〈茶道月報〉昭和三十一年七月号）

二　景樹七十賀

我袖もかはらぬ色に呉竹の、久しき世より誰か染めけむ　景樹　（須川家資料二）

この歌は『桂園遺稿下』天保八年四月の条に「緑竹年久」の題で収められており、後書に、

こはことしおのが七十の賀の祝歌也。

是をしをりに、猶また高き嶺にも登るべう、かみ中しも挙りていはひ給へりけるなべに、位山今一坂をさへ超つべき御沙汰うちうち聞えながら、その事果ぬやうもみえざめれば、さる意ばへをも竊にかこちよせて諷ひ出けるならし。

長門介平景樹

とある。

景樹は当時正六位下であったので、正六位上に進められることを望みながら叶わず、天保十二年に至って、特旨によって従五位下に叙せられ、介から守に上って肥後守に任ぜられている。

我大納言の君より、今年おのが古稀の齢を祝ひ給ひ下されたる越のしら根と、堆き御綿の上に、白雪の調をさへ謡ひ加へ給ひたるを、畏みあへず打かつぎて。

君にけふ万世までをいたゞきの　しろきは鶴の紅のうへ

丹頂の千世も数ならじと、辱けなみ奉る片居翁は　　長門介平景樹　　（須川家資料三）

この歌も『桂園遺稿下』の同年同月の条に収められている。

「我大納言の君」とは、主家徳大寺実堅（一七九〇［寛政二］年～一八五八［安政五］年）である。

景樹古稀の賀筵は誕生日四月十日に円山端寮で盛大に催された。

これに先立って、門人たちは賀会の準備に忙しかった。二月二十三日に熊谷直好[5]は高橋景張に「香川七十賀、小子等より御案内申入候。御出詠可被下候。」と賀歌詠出を勧募した。

（二月二十三日付景張宛直好書翰）

泉徳寺正聴も「来月十日宗匠古稀賀廻状来候事。但人数百四十六人程有之候事。」と記している。

（『泉徳寺正聴日記』）

賀会前日に直好は赤尾可官に「御細書忝拝見仕候。大人御賀ニ而段々御苦労被遊忝奉存候。いづれ明日は早々列席奉待候。随而金子壱包壱両弐歩弐朱也、右為御持被下候。慥に御預り申置候。」と報じている。

（可官宛直好書翰）

賀筵当日の四月十日、会する者はおよそ一六〇人、会費一人二百疋。賀歌の兼題は「緑竹年久」である。

かねてより君が齢のこもらずば　いかでか竹も千ひろなるべき　熊谷直好　（『浦の汐貝』）

仙人の千尋の竹は大空の　みどりとゝもにいく代なるらむ　秋園古香　（『秋園古香家集』）

みどりなるかの淇のくまのたかむらを　君が世祈るかげにからめや　穂井田忠友　（『穂井田忠友家集』）

霜ゆきは千度おけども呉竹の　みどりの蔭はとことはにして　山科元榦　（小川直澄宛書翰）

呉竹もけふ万世とうたふなる　声に緑の色やそふらむ　松岡帰厚　（架蔵懐紙）

天の下ならぶかげなき呉竹の　千世の色こそさやけかりけれ　八田知紀　（『しのぶ草』）

万代につたへむふしのなかりせば　ちよへてしげる竹もなにせむ　小野　務　（『小野務家集』）

山田清安は、

君が世は天津をとめの舞の袖　いく度かへす千歳なるらん　（『作楽園遺稿』）

の歌にそえて三人の美妓を席に呼び、景樹は「嬉しともうれしかりけるけふのまどひよ」と喜び、「酔のすさみに書よごせるを人みんや」として、

苔むせる老をば天津をとめ子も　なづるいはほのこゝちもやせん　（『桂園遺稿下』）

と大満悦であった。

三　景樹と高橋景張

高橋景張六十賀歌がある。

寄松祝　備後高橋景張六十賀

さぞと見て君がすみかを尋ぬれば　千世栄ゆべき松永の里　（須川家資料四）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この歌は『桂園遺稿下』の天保十一年五月の条に収められている。

高橋景張は備後国沼隈郡松永村（現在広島県福山市松永）の高橋雅安の四男で、家は塩田十二浜を所有する富豪である。通称は孝右衛門、号は養浩・風月庵・禎斎・三沖という。庄屋を勤め、畳表・帆木綿・干鰯などを扱って松永村の繁栄に尽力した。

読書を好み、詩文・和歌に長じ、横笛を能くし、生花・蹴鞠の技にも達し、また医術を学び、文化十一年に三十三歳で医師となり、禎斎と号した。

その交わる諸家には菅茶山・頼春水・頼春風・藤井暮庵・山路機谷・森田節斎・阪谷朗廬らがいた。

天保七年五十五歳で景樹に入門して景張の名を贈られ、帰国後は桂園歌風の伸展に力を致した。

天保八年の景樹七十賀についての熊谷直好の案内は前記のとおりである。

天保十四年三月二十七日に景樹が七十六歳で没し、四月二日に葬儀が行われ、六十二歳の景張は上洛して参列したことは、四月十四日付書翰で景樹嗣子景周が「昨日者御来駕忝奉謝候。毎々御懇篤に御訪被下候」と景張に礼を述べていることから知られる。

（四月十四日付景張宛景周書翰）

弘化元年三月二十七日景樹一周忌に景張は上京できなかったが、景周は「亡父追福御詠相願候処、早速御調御指越被下候ニ加え、御香料迄御手向賜下」と礼を述べ、松永でも追悼会が行われたことを感謝している。

（五月四日付景張宛景周書翰）

嘉永二年三月二十七日景樹七回忌に熊谷直好は景張の上京を勧めているが出席できず、景周は「当春七回之節者御詠出、且御香料御丁寧ニ預御手向」と礼を述べている。

（二月二十五日付景張宛直好書翰・五月二日付景張宛景周書翰）

景張は安政三年八月二十四日に七十五歳で没し、今津村の善性寺に葬られた。

文献　松永町誌・拙稿「桂園派歌人高橋景張」（『桂園派歌人群の形成』所収）

四　景樹と山路重恒

山路重恒に送る景樹の歌がある。

五月雨の名残晴やらぬけふしも、人のおくりたるを雫ながら参らすとて。

夏ながら千世の露こそ余りけれ　君が山路のしら菊の花

こは備後なる山路重恒、病を癒せん為に、さいつ日よりのぼりて、木や町にありけるに遣したる。

（須川家資料五）

この歌は『桂園遺稿下』の天保十一年の条に収められている。

山路重恒は備後国沼隈郡藤江村（現在広島県福山市藤江）の富豪（山路一族のうち蔵本家三代）で、字は士享、通称は源兵衛、号は抱海という。

文化五年九月二十四日に木下幸文が「藤江にく。重恒ぬしの家にはいさゝかさはりある頃にて云々」と記しているのを初見として、幸文と重恒との接触は親密であり（『木下幸文日記』）、文化一三年八月の『木下幸文判五十番歌結』の作者二十人のうちにも名を列ねている。

幸文が文政四年に没した後は直接景樹に師事したと思われ、山路一族のうち重信は天保二年三月二十四日に景樹に入門（桂園入門名薄）し、天保三年春には上京して、樵木町の景樹の別宅臨淵社の付近に宿をとって景樹を訪問しているので、天保十一年に上京した重恒が木屋町に宿をとって療病していたことも肯かれ

るものがある。景樹が「重恒」と呼びすてにしているのも、門人であることの証左であろう。

嘉永六年十一月四日に六十九歳で没し、菩提寺悟真寺に葬られた。法名は専修院欣誉帰西法子。

文献　拙稿「桂園派歌人山路一族」（『桂園派歌人群の形成』所収）

五　景樹と谷野きと子

天保十一年六月八日に谷野氏へ送る景樹の歌がある。

六月八日、谷野氏へ文のはしにかいつく。

千代もへん鶴の林の薬すら　おくるあひだに後れしものを

こはかの家の兒女難痘にて死したる百ケ日の逮夜なれば、ものおくりけるつひでにそへたる也。

我杜鵑霜つかはして、くすしきしるし有つれど、いとおくれたれば、終に其かひむなしかりし事を思ひてよめりしなり。

（須川家資料六）

この歌は『桂園遺稿下』の天保十一年の条に収められている。

景樹に関係のある谷野氏といえば、「桂園入門名簿」に、

天保七丙申年正月五日　　谷野藤太郎室きと子

とある以外にはない。

この「きと子」は須川家蔵『香川景樹翁門人集目録」には「幾登子」とあって、姓は記されていない。

天保十年六月の「京都臨淵社相撲番付」には、東前頭三十五枚目に「谷野きと子」とある。

きと子の作歌については、現在のところまったく未見であり、藤太郎・きと子夫妻についても未詳であ

るが、京都に住み、景樹の門人であったことの一端を示す資料である。

六　光格上皇諒闇の歌

天保十一年十一月十九日に光格上皇が七十歳で崩御され、翌天保十二年正月に詠んだ景樹の歌がある。

諒闇なれば春たつけふ日も常のまゝ也。されど歯固ばかりはとて物すめり。

祝ふべきけさのもちひの鏡にも　なき影のみぞ見えわたりける

こは私の闇也。

（須川家資料七）

この歌は『桂園遺稿下』の天保十二年正月の条に収められていて、この歌の前に病中の景樹はこまごまと記している。

芝山家御試筆もたせて御使あり。其御文の答へ。

諒闇の頃のむつき一日、宮内大輔の君より御園生の梅花半開きたる三枝ばかりに、

春もけふ立枝の梅の初花を　君がかざしに手折てぞやる

とよみ給ひくはへて下されたるを辱み奉りて、病に臥ながら強てもさゝげ戴くまゝに、しづ枝の苔はらはらと落ちければよめる。

世の中の涙に花もたぐふらん　かざせば袖にこぼれける哉

御返しには侍らねど御序に申させ給へ。

黒珠の闇てふものは、諒闇のやみも心のやみも、尊き卑しきけぢめなく、おほやけ私の隔てもあらぬにや。

天つ日のかくれし影にくらぶれば　蛍ばかりのおもひなれども

いともかしこけれど、親と子のわかちさへ侍らぬにや、いづれあやめもしらぬものなりけらし。

以上の歌文のうちに「こは私の闇也」「尊き卑き」「おほやけの私の」「親と子のわかち」とある「尊き」「おほやけ」は光格上皇の諒闇であるが、「私の闇」「卑き」「私の」とは、天保十一年十一月四日に景樹は娘楊子十六歳を亡っていて、その哀悼のことを言っている。「香川家過去帳」に「天保十一年十一月四日、景恒妹楊子十六歳、迎弍貞接信女」とある。

景樹としては、娘との「親と子」の永別の「私の闇」と、つづいて光格上皇の崩御の「諒闇のやみ」が重なっての「いづれかあやめもしらぬ」悲歎であった。

天保十二年冬、「楊子一周忌追悼」の景樹の歌がある。

冬夢　寒ければ誠の夢はむすばねど　去年のしも夜のおもかげにして　（『桂園遺稿下』）

天保十三年、「迎弍貞接信女三回忌追悼」の景樹の歌がある。

千鳥　老ぬれば友なし千どりあはれまた　子をおもふやみの空に啼くなり　（同前）

七　景樹と森川定見

伊予国の門人森川定見に与えた二首がある。定見六十歳賀歌である。

門人伊豫の萩生なる森川定見ぬし、神無月の末登り来て、けふしも語らく、おのれ今年は齢六十に成侍ぬ。こん春は氏族ども還暦の祝すと申さわぎ侍れば、其賀の哥乞参らせ、いさゝか其心ばへをも奉り祝て、御齢にもあえぬべく、けふのまどひはおのれ受ばりてんといひもあへず、設け置けん酒肴の

うまきかぎり、松間亭も所せくとりつらねたり。

さて、ほぎ戯れつゝ打見るに、げに卅年のそのかみにはいたくかはりにけり。更に夢舎と名のりけんもうべ也けりな。

千世もさぞ伊与の湯げたは数ならで　三十四十のまに六十へにけん

酔のすゝみに、こん二月の賀宴をさへ思ひやりてうたへらく。

祝ふらん君が千歳を待佗て　春もや今年はやく立らん

君さへにあすなんとくたつといへば、やがても是ぞうまのはなむけなりけらし。

肥後守景樹（須川家資料八）

この全文は『桂園遺稿下』の天保十二年十月の条に収められている。

森川定見は伊予国新居郡萩生村（現在愛媛県新居浜市萩生）の富農で、通称を平九郎・伝兵衛という。文化十四年に景樹は「伊予なる森川定倫が七月七日にかへるを送る。」として、

棚ばたのめぐり逢よにわかれゆく　君は春とも契りけるかな　（『桂園遺稿上』）

と詠んでいるので、この年三十六歳の定倫（後の定見）は上京して景樹に学んでいる。

前記天保十二年十月の景樹の歌の詞書に「卅年のそのかみ」とあって、天保十二年から三十年前といえば文化八年となり、文化十四年七月七日の歌と符合しないが、三十はおよその年数であろう。

定見の隠居名は「夢の舎」であって、天保五年の頃までには養子定静に家を譲って隠居したのであろう。定見の歌がある。

かしらおろして庵を夢の家と名付てよめる中に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com